



左) 黒竹さんの動きにアバターが連動。映像や動画配信機材に若者が触れられる機会を提供したい。 下右) 青森市役所の依頼で撮影した合浦公園。ドローンなら、普段は見られない景色と出会える。 下左) 風景撮影以外にも高所点検や農業への活用など、ドローンの持つポテンシャルは高い。



就職以外も視野に 多業も選択肢のひとつ。



1ター 黒竹 健司さん
千葉県 → 青森市
Little Gadget Lab (情報通信)
2022年2月創業

自動車ディーラーのエンジニアから青森市浪岡地区の地域おこし協力隊へ。コロナ禍での活動から創業を意識したという黒竹さんの現在をたずねました。

黒竹さんの創業まで

2018年7月 東京の移住相談会へ

2019年4月
協力隊として青森市浪岡へ

2019年11月 スタートアップに興味

2022年2月
Little Gadget Lab 創業

4月
移住コーディネーター活動開始



支援機関から一言

地域おこし協力隊として事前に地域との関係性を作り、地域のビジネス事情を把握できたことで、黒竹さんはスムーズに起業することができました。移住前から現地ニーズを調べることで、移住創業のポイントを押さえたお手本です。

インフォメーション

Little Gadget Lab



littlegadget.lab96@gmail.com

二足のわらじで走り出す
協力隊の任期満了直前の2022年2月、黒竹さんは個人事業主となった。映像の仕事としては、青森市広報番組「Aomo LIVE」の配信動画編集やイベント撮影、ドローン撮影。一般企業からの相談も徐々に増えている。2021年には、青森の祭や食情報を全国に発信する「オンライン青森体験フェス」にバーチャルユーザーとしても登場した。その一方で4月からは青森市移住コーディネーターに任命され、移住体験者のアテンドを行い

ながらラジオやケーブルテレビで移住の魅力を伝えるなど、二足のわらじを履いてのスタートとなった。「青森は、新しく生まれた業種でのライバルが首都圏に比べて少ない。開拓する楽しさがあり、自分ですぐに持っているもので創業できる場合もある。大企業へ食い込むのは難しくとも、個人事業主で多業・副業という形はとりやすいのではないかと」VRゴーグルなども昔より身近になったが、青森で直接見られる機会は少ない。今後はICT機材に触れて体験できるワークショップスペースを作ってみたいと考えている。

母のふるさと青森へ

青森市浪岡地区の地域おこし協力隊として移住した黒竹さんは、母親が青森市出身。母親から郷里へ移住したいという話が持ち上がり、一足先に黒竹さんが住み始めた形だ。以前は大手自動車ディーラーでエンジニアをしていたが、もともと田舎暮らしに憧れがあり転職を考えていたという。母親の話を聞いて東京の移住相談会に通っていたが、条件に合う求人がなかなか見つからず、協力隊の募集が道を開いてくれた。

創業を意識しはじめる

2019年、協力隊として地域PRの活動を続ける中で、市役所の担当課長かららりノベーションスクールに参加したらと勧められる。なんの気なしに参加したものの、まじめに事業計画を立てるはめになり、そのうえ

厳しかったと笑いながら振り返る黒竹さん。移住1年目で興味を持ち、青森商工会議所が主催するスタートアップセミナーにも顔を出そうになる。「自分で創業して生きる彼らが輝いて見えた」

創業するつもりなどなかったがはずが、講師としてやってくる現役創業者たちの姿勢に触れ、次第に考えは変わっていった。

移住2年目の2020年、創業をはっきりと意識する出来事が起こる。新型コロナウイルスの影響で協力隊の活動がストップし、PRもできない、移住希望者が青森に来てもうえないという事態に、黒竹さんは本格的に映像制作に取り組みむことを真剣に考えた。市役所の常駐スペースにデスクトップパソコンを設置して映像を編集・発信。ドローン撮影ができるのと知った他部署から、桜を撮って欲しいなどの依頼がくることもあった。